

「呉春」展によせて

呉春と芸事 — 関連作品と逸話 —

「特別展 呉春」では「画を究め、芸に遊ぶ」という副題を付けました。呉春の“究めた絵画”については展覧会場でご覧いただくのが一番ですので、ここでは呉春の親しんだ芸事の一部をご紹介します。

本展では「太施太子図」(林喜右衛門家蔵、挿図1)という珍しい画題の作品を出展します。「太施太子(たいせいたいし)」とは謡曲の演目の一つですが、現代では上演されなくなった曲であるため、知っている人はほとんどいないでしょう。その内容は、財宝をもたらす宝珠をめぐる物語です。

太施太子とは、天竺の婆羅内国の帝の名です。あるとき、太子が国民の貧しいことを嘆いて梵天に祈ったところ、龍宮の如意宝珠を授けられました。この宝珠のおかげで宮中は財宝に満ちあふれ、貧しい者にも財を分け与えることができました。そんなときに、財宝は要らないから宝珠を見せてほしいという女性が現れます。実はその女性の正体は龍女でした。龍女は宝珠に近寄ると、それを奪って龍宮に逃げてしまいました。そこで、再び宝珠をこの国に取り返してほしいと祈ると、帝釈天や四天王が現れて龍宮から宝珠を取り返してくれた、というあらすじです。

呉春は「太施太子図」の画面右側に、三方に載せられた宝珠を囲む人々を描いています。その左側には、代々謡を業としていた林喜右衛門の五世である女好(1730～85)が、「太施太子」の詞章の一節をしたためています。林喜右衛門家に残る史料によれば、「太施太子図」は正月の宴席で描かれたものとされており、呉春の署名にある「戯墨」も席画であることを示すと考えられます。林喜右衛門家の人々と呉春とが、親しく交流していた様子がうかがえる作品です。また、女好は、謡も非常に上手だっ

た呉春に、大成できるのは絵画の道だと勧めたらしく、優れた呉春の絵画が世に生み出されるきっかけを作った重要人物といえるでしょう。

後世まで呉春の名を知らしめたのは確かに絵画でしたが、謡曲に関する知識は相当だったようで、呉春筆と伝わる「謡会記録」(柿衝文庫蔵)も興味深い作品です。署名はありませんが、書風や文章の面白さから呉春の作とみなされています。その中身は、詞章の一節を踏まえた景品を持ち寄って福引を行う、謡福引と呼ばれる遊びの記録となっています。景品は弓の組と矢の組に分かれて優劣が競われ、呉春は判者を務めたようです。判者は詞章に通じていなければできない役で、なかには詞章の誤りを指摘した箇所もあり、呉春の素養がうかがえます。

呉春は謡のほかにも笛も得意としていたといえます。京都・妙法院門跡の真仁法親王(1768～1805)は様々な儒者や歌人や絵師などとの交流で知られており、呉春も妙法院には頻繁に出仕していました。妙法院での出来事として、次のような逸話が「古画備考」(1850年起筆)に記されています。あるとき呉春は妙法院に招かれて「乱舞」を鑑賞しました。ここでの「乱舞」が何を指すのか明確ではありませんが、器楽を伴う芸能だったのでしょう。このとき、「多芸ではあるが今日のようなわざはできないだろう」と真仁に言われた呉春が、「若い頃に笛を少し吹いていました」と述べると、「では吹いてみなさい」と真仁から笛を渡されました。呉春が笛を口に当てるも吹き始めない様子を見て、その場にいた人々は呉春が困っていると思って笑いましたが、吹き始めるとその音色に皆感じ入ったといいます。『妙法院日次記』という史料には、実際に呉春等が招かれて能を鑑賞した記録が確認でき

(1791年2月22日)、このような一幕も本当にあったかもしれません。

最後に蹴鞠についてもふれておきます。呉春は妻や父を相次いで失ってから池田に移り住みました。先の「謡会記録」は池田で催された会の記録であることからわかるように、池田の人々は文化活動への関心が高く、蹴鞠にも情熱を注いでいました。近代まで池田に伝わった作品に「蹴鞠六境図」(所在不明、『撰津池田稲東聴松軒氏所蔵品入札』(1934年)所載、挿図2)があります。久世通章『蹴鞠』(大日本蹴鞠会、1938年)に久世家所蔵として掲載される仇英筆「太祖蹴鞠之図」(挿図3)と同図様で、描かれた人物の説明を加えた賛文も同一です。ただし、呉春作品は飛鳥井家に伝わった唐寅作品に倣ったものともいわれています。詳細不明ではありますが、呉春が池田で蹴鞠

に携わって制作した蹴鞠の図は、呉春が手を染めた様々な芸事が画業につながっていったことを示しているといえるでしょう。(仁方越洪輝)

参考文献

- 吉田鋭雄・稲東猛『池田人物誌下』(太陽日报社、1924年)
田中允編『未刊謡曲集続7』(古典文庫、1990年)
大谷節子『素謡の場—京観世林喜右衛門と田福・月溪—』(『神女大國文』11、2000年)
安永拓世「呉春筆「白梅図屏風」(逸翁美術館蔵)をめぐる」(『画下遊樂(二)』藝華書院、2018年)

※挿図2は『古画総覧四』(国書刊行会、2003年)、3は掲載書から転載しました。



挿図1



挿図2



挿図3

季刊 美のたより No.228

令和6年10月4日

発行 大和文華館